

第4回なんでそんなん大賞 W受賞！！

審査員賞 ◆柳沢秀行賞 (大原美術館学芸統括)

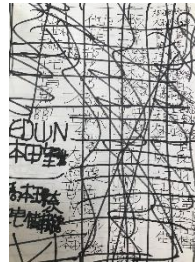
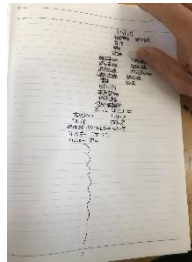


掲載サイトはこちら

タイトル | 連絡帳 Contact book

行為者 | Taさん Actor | Mr.Ta

発見者 | 山根 (支援者) Finder | Yamane (Supporter)



Taさんは平日の日中を生活介護事業所に通い、夜はグループホームに帰る。生活介護とグループホームのスタッフ間でやりとりする「連絡帳」。

ある時から、Taさんが空白のページに色々な文字を書きこむようになった。日付がついているので、その日の記録、あるいは連絡なのかもしれない。書き終わるとスタッフに見せ、「できた」「じょうず」と言って、スタッフも「じょうず」と返す。それから自分のリュックにしまう。

大和路線 大阪環状線 / 普通 快速 / EDWIN / 本田望結 / 橋本環奈 / 住宅情報館

最初はこれが定型だったけど、日を追うごとに語句が増えていく。文字は踊り始め、効果的に線が加えられる。このままエスカレートしていくのかなと思ったら、ページの余白を活かして配置される時期が挟まれる。書道でも「余白」が大事というし、華道の「引き算の美学」にも通じるのかもしれない。そして、ページが文字と線で埋め尽くされる時期がくる。ボールペンに加えてマジックペンが使われ、独特のルールで重ねられていく。そして、真っ黒の「連絡帳」が完成した。

これは Taさんのプライベートな創作物でしょう、webサイトにアップするなんて、Taさんは望んでいないんじゃないの？ 確かに、投稿の許可をもらってはいても、Taさんの本当のところはわからない。僕は、Taさんについて投稿することを、自分で正当化できない。それでも、

「自分は行の途中から大胆に文字を書くなんでできないな」

「関西本線を4行にわたって書くのってどうということやろう」

「この表紙のテクスチャーはすごい」

言葉少なな Taさんの、大切な表現、個性に対する驚き / 感動をどうしたらいいんやろう。それを、コンプライアンスの中で平準化してしまうことが、どうしてももったいないような気がする。

葛藤するならやめておいた方がいいんじゃないか。その方が無難じゃないか。

でもなあ…

連絡帳を、その目的から逸脱して真っ黒にしてしまう行為。これをポジティブに捉えることが、Taさんの生きやすさにつながるなら、自分は葛藤していても他の人と共有したい。

そんなこと、Taさんは多分どこ吹く風で次の創作に取り掛かっているけど…





【審査員賞】◆菅原直樹賞(劇作家、演出家、俳優)



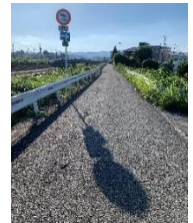
掲載サイトはこちら

タイトル | ちゃんと GPT | Chant GPT

行為者 | Yくん Actor | Y-kun

発見者 | みずの Finder | Mizuno

久しぶりのYくんとガイドヘルプ。以前担当したのは彼が3年生か4年生のころ。今は20代半は?くらいになり、僕よりも大きくなっていることに驚きつつも、どんな風に余暇を過ごすのか楽しみでもあった。16:00~18:00 夏の酷暑の中、ひたすら散歩。万歩越え。運動不足の46歳となった私にはきつい…。今回は道中での彼との会話から。



Yくん 「サントは青と白」 私 「いや、赤と白」 Yくん 「サントは黄色と白」 私 「いや、赤と白」 Yくん 「サントは黄緑と白」 私 「いや、色混ぜてもダメ。赤と白」 Yくん 「サントはピンクと白」 私 「おいしいね。赤と白混ぜるとピンクやけど。」 Yくん 「サントは紺色と白」 私 「いや、遠のいたよ。赤と白」 Yくん 「サントは黒」 私 「黒づくめのサントはいませーん。」 Yくん 「ブーツ」 私 「あ…ブーツは黒やね」 Yくん 「サントは黒」 私 「サントのブーツは黒やね。正解」 Yくん 「やった。」 Yくん 「青色と白」 私 「ぶーっ。赤と白。」…続

会話は途切れることなく2時間の散歩。返答の引き出しを試されているような、誘導されているような…。汗びっしょり、足パンツパンツでしたが彼の成長を感じ、会っていなかった時間を想像し彼の世界をいっしょに並走している心地よい時間でした。

なんでそんな大賞って???

>岡山県にある「ぬか つくるとこ」という生活介護事業所が取り組まれている「なんでそんなプロジェクト」という取り組みがあります。人の行為から生まれる「よくわからないこと」に対して真摯に向き合い楽しむための方法を探るプロジェクトです。今回、法人から山根と水野が投稿した作品?が多くのお応募作品の中から審査員賞をW受賞いたしましたので、ご報告させていただきます。プロジェクト詳細は右のQRコードよりご覧ください。賛否あるかもしれませんが、措置から契約へと時代が移り、法や事業が整備されながら、仕方ない、とボヤキながらいつのまにか深まる線引きと制約の向こうに忘れかけている関係性をなんだか懐かしくも思い出す感覚がありました。今回はご紹介を兼ねて通信にて報告させていただきます。(文 水野)



なんでそんなプロジェクト

いっしょに考える。いっしょに行く。